国際シンポジウム　ディスカッション

古事記学センター　編

司会　成田信子
登壇者　吉永安里
原田留美
シャロンドン・エミリア
岩瀬由佳

【成田】皆さま、改めましてこんにちは。人間開発学部の成田と申します。国語教育を専攻しております。本日のシンポジウムでは四人の先生方に幅広いご提案をいただきましたので、討議の場で、神話・伝承の教材化と実践ということにつきまして、さらに考えを深め、また、会場の先生のご意見も伺いながら、古事記学センターの事業である『こども古事記』にもつなげていきたいと思っております。どうかよろしくお願いいたします。

では、時間、限られていますが、討論の進め方をお話しします。まず、四人の先生がそれぞれご発題になりましたので、それぞれのご発題についてお感じになったこと、それから疑問等ありましたら、お出しいただきたいと存じます。

一番大きいところは、神話・伝承を子どもたちが学ぶ意義についてだと思いますので、その点についても最初に四人の先生にぜひお話しいただきたいと存じます。続きまして、その後、先生方に何かご意見を頂戴できることがあり

ましたらいただきまして、後半で、教材化と実践のテキストの問題もありますので、具体的な諸問題について、またご意見をいただく場にしたいと思っております。

ご発題の順にお互いのお話を聞いての所感、それから神話・伝承を子どもたちが学ぶ意義という、かなり大きなところですけれども、そこからお話しいただきたいと思います。では、吉永先生、よろしくお願いします。

【吉永】 今日は皆さま、ありがとうございます。きっと同じような感想を共有されているかなと思うんですけれども、私のほうから、先生方のお話を伺いまして感じたことを大きく分けて三点ほど、感想と、神話・伝承の意義、教材化していくことの意義ということについて述べたいと思います。

まず、一つ目は、私自身も教員になってから、伝統的な言語文化というのが入ってきて、どのようにそれを指導したらいいかということは、神話・伝承に限らず、ずっと悩みながらやってきました。その中で、特にこの神話・伝承の扱いというのは、昔話以上に、どういうふうに扱ったらいいか悩んできたわけですが、原田先生のお話を伺いながら、子どもたちにとって、読書の幅を広げていくという点でも、いろいろなジャンルのお話があるんだということを知っていく、ひとつのきっかけになるということを強く感じました。

二つ目は、幼稚園や小学校に勤めて、自分の同僚たちがどんなふうに読んでいるかということにも関心を向けたときに、最近の若い先生方は欧米の話については割と親しみがあって、本の読み聞かせも日本の昔話よりも、割と新しいお話ですとか、欧米の物語を読んでいる傾向があると感じるということです。

その中で、日本の昔話や神話があったんだということを小さなうちから知り、親しんでいくということが非常に重

要なのかなと感じます。私自身幼児期に、渋谷に昔あった五島プラネタリウムというプラネタリウムにずっと通っていたんですけれども、その頃にギリシャ神話の絵本ですとか子ども向けのお話というのは親から紹介されたんですが、その当時は全く日本の神話というものに触れたことがありませんでした。『古事記』について知ったのは、小学校高学年になったときに図書室にあった本を見つけて、ちょうどイザナミが黄泉の国に行ってしまって迎えに行くというところのシーン、非常におどろおどろしい話だったわけなんですが、そのお話を読んだときに、日本にもこういう神話があったんだということを初めて知ったわけです。日本の今の子どもたちにしてみると、逆に、欧米の神話や物語のほうが親しみがあるということもあるのかなと思うと、一、二年生のところに日本の昔話や神話、伝承に触れる機会があるのはとても大事なことだと思います。

三つ目に、シャロンドン先生もおっしゃっていたんですが、古典を今の時代、特に私たちが伝えていくといったときに、神話もたくさんいろいろお話があって、それをありのまま受け止めるという良さもあるし、逆に神話の要素をもとにして、新しい物語を生み出していくということもとても大切だということです。それが非常にすてきだなと思いましたし、前回のワークショップでも、アンリ先生というロンドン大学からいらした先生が、イギリスでもシェークスピアの作品を劇として扱うけれども、日本の歌舞伎は当時のままの衣装で、当時のままのように演じられるけれども、シェークスピア劇の場合には、今の衣装を着て、シェークスピアの例えば『マクベス』なら『マクベス』を演じるという、現代に受け入れる形で古典が引き継がれているということをお話しされていて、その辺りも面白さというか、神話は神話をそのままとして私たちが引き継いでいくということと、また、私たちが現代人として神話を新たな物語として何か作り出していくということの楽しさということも両方感じられました。

私からは三つです。以上です。

【成田】 原田先生、お願いします。

【原田】 大変興味深いお話を伺えて、参加させていただけて嬉しく思っております。私のほうからは、お一人お一人に沿ってという形で話させていただきます。

吉永先生のご発表を伺って、私の一番弱いところ、現場とどうつながっているかという部分が大変分かりやすく、ご紹介の資料をネットで見てみたいと思っております。子どもたちの生の感想もとても興味深かったです。教材を考えるときには、教えられる現場と切り離してというのは違うと、私はともすれば、作品だけを現場から浮いた形で扱いがちですが、常に現場に返していくということも、研究として必要だということを改めて勉強させていただきました。ありがとうございます。

それから、シャロンドン先生のお話をお聞きして、一番どきっとしましたのは、『古事記』について考えていくと、自分でもどこか細かいところ、狭い範囲でいかに確実な話をしていくか、考えていくかにとらわれる、ある意味、視野狭窄を起こしていくところがあるんです。そこを一気に開かせていただいたということで、大変興味深く承りました。穴に落ちないように、いろいろなことを考えながら研究していきたいと思っております。

それから、さまざまな日本の神話というのがあって、一つに決める必要はないと。さまざまなものをさまざまな特徴のままに受け止めていくということも大事と言われていましたが、そのお話と直接つながるかはわかりませんが、

『古事記』には『古事記』の、あるいは『日本書紀』には『日本書紀』の、『古語拾遺』には『古語拾遺』の、「風土記」には「風土記」の、さまざまなテキストにはそれぞれの神話があるとする研究もあります。そのことを思い浮かべながら聞いておりました。

それと、『ハリー・ポッター』を例に、現代の児童文化、あるいは大人向けの文学も考えられると思うんですけれども、神話を生かしていくということについてですが、私、児童文学も少しかじっておりまして、荻原規子さんという方がいらっしゃいます。三十年前に古事記神話をベースにしてたファンタジーで新人賞を取った方ですが、その方の作品を思い出しました。今でも古くなっていない、面白い作品です。「勾玉三部作」といわれる『空色勾玉』『白鳥異伝』『薄紅天女』という三部作がありまして、最初の二つは『古事記』をベースにしています。ぜひ皆様、お手に取って見てくださいませ。

それから、最後の岩瀬先生のインドのお話というのは、初めて聞くことが非常に多くて、勉強になりました。最後におっしゃいましたけれども、大人は原典を知らずに読み聞かせをしていたりする。本当にそうですね。何となく知っているつもりではあるけれど、一度立ち止まって、元々の姿って何なんだろう。そんなことを考えるのも大事かなと。そして、元々の姿を知った上でそれを超えて、子どもにとって良い物語は何か、子どもにとって良い物語の姿は何なのかということを再度考えようという気持ちになりました。ありがとうございました。

子どもにとって古事記神話とか物語に親しむ意味は、発表の中で話をしてしまいましたので、簡単に繰り返しますと、より複雑な物語への入り口になるということだと考えています。厳密には『古事記』に近い形でなくても、幼い子どもたちに分かりやすいリライト作品ならば、次の読書に多分つながっていくだろうと思います。

失礼いたしました。

【成田】 シャロンドン先生、お願いします。

【シャロンドン】 上手には表現できないと思いますけれども、私は、子どもに神話を教える意義についてのお話から始めます。どうして小さな子どもに神話を教えなければならないのかと。大人には必要で、大学生にはぜひと思いますけれども、小学生、特に一、二年生には、どうしてこのような重い世界遺産をその小さな肩に掛けるのか、というのが私の大きな疑問です。親しむということがありますけれども、神話は親しむものではなくて、ものすごく大きな問題を考えさせるものですので、「いなばのしろうさぎ」をぴょんぴょんと教えることは、神話を教えることにはならないと私は思っていて、発表を聞きながら、そういうことをまた思いました。

けれども、先生方の発表を聞くと、実際に日本の学校でそういうやり方もあるということで、スコットランドの友達が子どもにスコットランドの神話を聞かせて、絵を描かせて、その絵を基に作ったというアニメーションを見たことがあるのを思い出しました。私が見たアニメーションは、もちろんスコットランドの神話、ケルトの神話も王家と関係があって、子どもの首を切ったり、血で散らかされたり、それが子どもの絵に出ていましたので、私、それもショックでしたが、皆さんそれなりに神話を教えなければならないと思って、一生懸命、私たちが考えることを子どもに伝えようとしているということを思いました。

そしてそれはインドでも同じことですね。神話ではありませんが、民話でも同じ問題があります。例えばディズ

ニーの映画で取り上げられているヨーロッパの古い民話は、現代ものすごくいろいろな問題を起こします。先ほど、先生もおっしゃいました女性の立場の問題が一番に、それ以外のたくさんの問題が引きずられて、昔の神話も民話も別のものとして伝えなければなりませんけれども、似ているところは、両方とも昔の価値観、昔の遺産ですので、それを現代の私たちは自分の子どもたちに教える価値観とぶつからないように伝えなければならないということを、より意識しました。最後のご発表を聞いて、よりそのことを感じました。ありがとうございました。

【成田】　ありがとうございます。岩瀬先生、お願いします。

【岩瀬】　教育ということに関しては、私は大学教員をしておりまして、主に教えているのは英語ではありますけれども、英国とイスラームの文化を教えることもございます。その意味で全く無縁の話題ではないと思います。

今回の発表を聞きまして、ほう、と思いましたのが、「因幡の白うさぎ」のワニの話です。確かに「わに」がワニじゃないということは聞いておりましたけれども、「わに」という言葉の問題とよく似た問題が、実は私の今日の発表にもありまして、ずっと「鰐」と訳しておりましたのは――今日使った資料は全て英語で書いたものであったんですけれども、ご承知のように、インドでは高等教育を受けるような豊かな家庭の子どもたちは英語で教育を受けますから、英語ができます。ということで、そういった豊かな家庭での子どもたちの教育ということで英語の資料を選んだわけですが――、サンスクリットでは、ワニに当たる単語は、実はワニではないといいますか、ワニとは限らないと言いますか、何か分からない水棲生物、大きな水に住む生物という意味であって、文献によってはカワイルカと解

釈していることがあります。ガンジス川にはイルカがいます。確かに、ワニというふうに解釈すると、ワニがいる場所は川が多いでしょうから、物語の舞台を川に替えたんだろうなと思います。子ども向けでない（注：リライトしていない）『パンチャタントラ』では、場面は海なのです。全然関係ないんだけれども、共通の問題として面白いなと思いました。

特に今回、私が興味をもちましたのはシャロンドン先生のご発表で、誰が一番神話を知るべきか。大学生、なるほどなと思いました。私のアメリカ人の同僚が（注：英語の授業で）聖書の話を一生懸命大学生に教えようとして苦労しております。私も聖書は良い題材だと思って、前々から子ども用にリライトしたものではなくて、一六〇〇年代にジェームズ国王が作らせた（注：英語の）欽定訳を読ませるんですけども、もちろん現代語ではなくて、古めかしい英語ですが、難しいですけれども、今の英語の中にたくさん入っていることわざを理解するには、やはり欽定訳を使うのが一番ということです。仲間がいたなと思いました。

それから同じく、シャロンドン先生の今のご発言の中で、ディズニーのことが出ましたが、ディズニーはいろいろな題材を扱ってくれるので、とっかかりという点では非常にいいと思うのですけれども、弊害のほうを私は強く感じております。例えば『千一夜物語』を教えるときに、「アラジンの舞台はどこ?」と聞くと、みんなエジプトとか中東の街を答えるんです。どこでしたか、ヨーロッパで出版された挿絵では、これも間違っているんですけど、弁髪姿の魔物が出てきます。時代的に間違っていますけど、場所的に合っているんです。今私たちが言う中国のどこかなんです。もっと言うと、アラジンって『千一夜物語』ではないんでしょうけれども。今日の話題とは関係ないんですけども、思いだしました。

マンガでは、先ほど、私の知らないマンガをおっしゃっていましたが、マンガでも『古事記』を扱ったものがありまして、古いんですけど、美内すずえという『ガラスの仮面』で知られる作家が、『アマテラス』というのを描いています。全くの『古事記』ではないんですけども、関連したものも実はたくさんあると思いました。以上です。

【成田】　いろいろご発言が出たのですけれども、子どもに神話・伝承を教える、次世代に語り継ぐということで、伝えること、発達の問題が取り上げられました。学習指導要領はどうなっているのかということにもつながる大きな問題が出されたかと思います。

それから、教材化と実践を巡っては、「いなばのしろうさぎ」は一つの切り口になると思いますが、ある物語をエピソードとして取り上げること、そしてそのエピソードの持つ面白さ、モノ、コトにもつながるような、一つの実践の工夫が語られました。一つ切り取って見せる面白さとそこに生じる問題について、後半、教材化の問題、実践の問題として取り上げたいと思っています。

ご実践なさっている先生も会場にいらっしゃると思いますので、ご質問、ご意見ありましたら、ぜひお手をお挙げください。ご所属等、お話しいただけるとありがたいです。いかがでしょうか。ありがとうございます。今、マイクがまいります。

【永吉】　宮崎大学に勤務しております永吉といいます。国語科教育を専門にしております。

宮崎の人たちはなぜか「日向神話」と言うほうが雰囲気が出るので、宮崎ではそれを使っているんですが、それを

いかに小学校の教材にするかにちょうど今、取り組んでいるところで、今日のお話を大変興味深く伺いました。

これは質問というより、意見というか、感想というか、お伝えしてもいいかなということなんですが、予稿集の六頁に原田先生が小学校の国語のテキスト掲載作品という一覧を載せてくださっています。これが今年までの現行の指導要領の教科書の状況なんですが、来年から新しい教科書になるということで、今どこの会社か忘れてしまって申し訳ないんですけど、どこかの一社が来年から「いなばのしろうさぎ」を載せてないということを今思い出しました。それは全く落ちているわけではなくて、囲み記事の状態で載っていたと思うんです。それがどういう載せられ方をしているかというと、それをきっかけに地域に伝えられているお話を調べてみましょう、という頁だったと思うんです。地域に伝わるお話を調べてみましょう。例えばこういうのがあります、という載せられ方だったと思います。つまり、小学校二年生どこまで行けるか分かりませんけれども、『古事記』を探究的な課題、小学生なりに地域に伝えられている言語文化、言葉によって伝えられてきている古代の人のものの見方、考え方を調べてみましょうと。例えば、「いなばのしろうさぎ」、例えば「ヤマタノオロチ」がありますと、そういう教科書構成になっていたと思います。それが私個人としては弱いなと思って、もっとがっつりいこうよと思うんですけれども、一つの切り口というか、扱い方として、探求的な課題の素材として、『古事記』のありようというか、在り方がいけるのではないかところを感じましたので、もし、そのあたりでお考えがあれば、お聞かせいただければと思いました。以上です。

【成田】 先生、ありがとうございます。今の点についてご意見のある方どうぞ。

【原田】 資料に載せたのは現行の情報ですとことわったのは、実は、まだ来年度の教科書は見ていないんです。なので不確実なことを言ってはいけないと思って控えましたが、ご指摘のところ、私も気が付いてはいました。その会社の教科書は、二十三年度のときにも載せてなかったと思います。二十三年度のときには載せず、二十七年度の改訂のときに初めてまとまったリライト作品を載せた。で、また、今回抜いてきた。個人的には、その教科書に載っている再話は、良いと思っていて、もったいないなと。

ただ、自分の地域の物語に関心を向けるという指導の在り方は一つの方法としてありなのかもしれない。ただし、二年生のいつ頃にその課題をするのかが気になります。現行では、上に載っていたかと思います。探求を二年生にどこまでさせられるかというのは、これは現場に詳しい先生のほうがおわかりと思いますが、素人ながらに疑問に思いました。

それから、シャロンドン先生のお話とつながっていきますが、神話は昔話と違うものだと。垣根を越えて、神話から郷土のお話につなげるというのは、子どもの関心を広げるという意味ではいいやり方だと思いますが、神話とは何か、昔話とは何かということに、気づかせていくときに、混乱のもとにならないかなとも思いつつ、でも、二年生の場合、どこまで区別できるのかということもあります。

貴重な情報ありがとうございました。

【成田】 ありがとうございました。時間の関係もあるので、もう一つ、教材化と実践に関して、私ども古事記学センターで『こども古事記』のテキスト化を現在進めているので、それに関する話をしたいと思います。

テキスト化をするときに対象年齢の問題があると思いますが、小学生ぐらいまでを想定してテキストを考えているところです。吉永先生から、構造と内容と表現が切り口としてはあるんじゃないかとご発表がありましたが、今日話題になった中で、構造は非常に大きな問題だと思います。構造というのは、例えば名乗りという大きなくくりで見たときに、シャロンドン先生がおっしゃることにも通じる、テキスト編纂の方向もあるかと思います。世界の神話というところで見た共通性なり、違いにもつながっていくと思います。大きな意味での構造、それから内容の問題です。それから語彙、語句、文、文章といわれたときに、子どもに伝えるときに、例えば古典の語彙をどういうふうにしていくかという考えも非常に大事かなと思っています。

時間の関係で、すみませんが、最後に、吉永先生からテキスト化についてご発言お願いします。

【吉永】 今、宮崎大の永吉先生もおっしゃってくださっていて、テキストそのものをどう扱うかということも含めて、やはり教材化、テキストをどう作るかということと関連して、恐らく現場では、それは幼児教育の現場かもしれないし、小学校かもしれないし、ご家庭かもしれないけど、どのように扱ったらいいかということを私たちはセットで考えていかないといけないのかなと非常に強く思っているところです。

私が先ほど述べたことですが、小さな子どもたちはやはり文字だけでは理解ができないというところもありつつ、例えば光村図書は、今は挿絵のない状態で、先生に読み聞かせをしてもらう形で、お話とか素話とか幼児教育では言うんですけれども、絵を用いずに語っていくことで、イメージを広げて聞くという方法もある得るのかなと思うと、テキスト化するときに挿絵を載せるかどうかも一つ、もしかしたら課題なのかもしれないとも思いました。

挿絵を載せると、難しい問題かもしれないけれども、ワニにするのか、サメにするのか、あるいは、すごく古い戦時中の絵本を古事記学センターから借りたんですが、この『大国主命』のお話にはワニザメと書いてありますが、そのワニザメにするか子どもたちにとってどれがよいかという問題が生じてきます。絵があることでイメージが制限されてしまうのであれば、例えば古典の中でワニと元々書いてあるものをそのまま子どもたちがワニというのがどんなものなのかと、私たちが日頃動物園で見るようなワニなのかどうかということも含めて、子どもたちが不思議だな、面白いなというものを、この時期に解決するということではなく、いつまでもある程度それを保持していて、成長するにつれその年、その年で掘り下げていくという読み方をすることも、教育の中ではすごく大事なことなのかなと思っています。例えば一、二年生のときに、神話をそのままワニということで読んでいて、ワニって一体なんだったんだろうな、不思議だなって思っていて、それが小学校高学年や、あるいは大学生になったときに、また神話に出会ったときに、ワニというのはもしかしたら自分が想像していたのとは違うかもしれないといって、そこからまた新たな探求が始まっていくという可能性を包含したテキストということもあるのかなと思いました。すみません、漠然としているんですけれども。

【成田】　では、原田先生お願いします。

【原田】　『こども古事記』、どんな作品ができるのか、私も楽しみにしています。ただ、対象が小学生ぐらいまでということなんですが、小学校二年、せいぜい三年生ぐらいまでと、四、五、六年生だとだいぶ発達が違う。どちらに照

準を合わせるのだろうということが一点あります。どちらもというのは難しいのではという気がする。「子ども古事記神話」でなく『こども古事記』ということは、もしかすると中巻、下巻の面白い話まで考えていらっしゃるのか、あるいは上巻だけにしても、流れが分かるようなものを考えられているのだとすると、多分必然的に対象年齢が上がっていくと思います。

小学校四年、五年、六年ぐらいを対象にするなら、リライトを上手にすれば、児童向け『古事記』は作れるのではないか。実際、三浦佑之先生が監修なさっている本が出ていますので。いずれにしろ、小さい子対象にするのか、高学年対象にするか、そこはターゲットをはっきりしたほうがいいんじゃないか。年が上のほうなら、かなり『古事記』に近いものを提示できるような気がします。

【成田】 ではシャロンドン先生、お願いします。

【シャロンドン】 私も賛成です。子どもの年齢に分けて、小学校に伝えるのなら、小学校の高学年に適当なタイトルでテキストに近いものを、上手に文学的に採用すればできるのではないかと思います。

【岩瀬】 吉永先生がおっしゃいました挿絵の問題は大きいと思うんです。ディズニーの映画ではないですけども、子どもは視覚的な情報にとらわれがちですので、あまり固定化されたイメージを与えると、それで固まってしまいます。挿絵にしても、風景であるとか、そういうのを背景に置いて、間違いようのないものは描いてもいいと思うんで

すけれども、挿絵は少なめがいいんじゃないかと個人的に思います。

【成田】 ありがとうございました。ここからが、というところでしたが、今日は残念ながら時間が限られております。申し訳ありませんが、これにてシンポジウムを閉じさせていただきます。ご登壇の四名の先生方、どうもありがとうございました。